

第2章 神々の誉れ

白鳥がアポッロンあるいはムーサの鳥とされたように、鳥の中には特定の神格に仕えて神聖とされるものがある。本章では、そうした鳥にまつわる神話を見てゆくことにする。

1 鷲とガニメーデース

神々の王であるゼウスに仕える鳥としては、やはり鳥の中の王と目される鷲がふさわしい。そして、鷲が神のために働きを示した物語として、トロイアの名の起源となった王トロースの子、美少年ガニメーデースをさらったことがよく知られている。ただ、古い伝承では、

金髪のカニメーデースを賢きゼウスはその美しさゆえにさらった。そうして彼を神々のあいだに置き、ゼウスの館で神々に酌をさせたが、それは鷲異の眺め、彼はあらゆる神々から誉れを受けつつ、黄金の酒壺から真紅のネクタルを汲み出した。だが、トロースの心は消しがたい悲嘆にとら

われた。まったく分からなかったからだ、神風が愛しい息子をどこにさらっていったものか。そうして息子のことを思い、泣きくれる毎日が続いていたところ、ゼウスが憐れみを覚え、息子の代償となる贈り物をした。蹴り上げる脚高く、神々を乗せる馬たちであった。これらを贈り物として授けると同時に、ゼウスの指示により使いに立ったアルゴス殺しの神ヘルメースが、事の一部始終を語って聞かせた。ガニュメーデースが神々と同じく不老不死となっているというゼウスからの知らせを聞くと、トロースはもはや泣くことはせず、心から喜び、喜びいっぱい風にように駆ける馬を進めた。

〔「ホメーロス風讃歌」五・二〇二—二一四〕

というように、鷲は登場してこない。⁽³⁾鷲がさらったというモチーフが文学に用いられるのはずっとあとのこと、たとえば、ウエルギリウス『アエネーイス』には次のような一節がある。

織り込まれた絵は王家の少年で、葉陰濃いイーダ山に投げ槍を携え、足の速い鹿どもを飽くことなく追っている。気合い鋭く、息を弾ませているように見える少年を、鳥がイーダより空中高く鉤爪の足で連れ去った。ユッピテル神の武器を担う鳥であった。⁽⁴⁾掌を空しく星々へ差し伸ばしている年寄りたちは少年の守り役で、そばでは、犬たちが空へ向けてすさまじく吠えている。

〔「アエネーイス」五・二五二—二五七〕

孝心厚いことで知られる英雄アエネーアースは、放浪の途次にシキリア島で迎えた父アンキーセースの一周忌に当たり、法要のために競技祭を催した。引用は競技の賞品の一つとして出された外套の絵柄を描写したくだり、ガニュメーデースがさらわれた瞬間を生き生きと浮かび上がらせている。

また、ホラーティウスは次のように歌っている。

それはさながら雷電を降らせてまわる鳥のよう。これに神々の王は飛び回る鳥たちへの統治権を授けた。この鳥の忠誠を、ユッピテルは金髪のカニユメーデースの一件で見きわめていたからだ。それは、かつて若さと父譲りの潑刺さにより労苦を知らぬまま巢から飛び出したあと、いまや黒雲が去つて晴れた春の日に不慣れな身で翼の踏ん張りを学ぶとき風に心が震えるが、すぐに羊小屋へ舞い降りると敵に勢いよく襲いかかったかと思えば、抗う蛇に向かい、食欲と闘争心に駆り立てられた鳥。

〔カルミナ〕四・四・一一二

この詩全体は七六行からなり、アウグストゥスの継子ドルーススのアルプスでの戦勝をたたえている。引用はその冒頭部分で、ドルーススを驚に、アウグストゥスを神々の王ユッピテルに喩える比喩をなしている。絶対的権力を揮う支配者に媚びへつらっているような印象を受けるかもしれないが、王侯やその実績をたたえるのも古代における一つの文学伝統である一方、アウグストゥスをユッピテルになぞらえるのも当時はほとんど常套化したモチーフであったことには留意する必要がある。

さて、ヘレニズム期以降になると、驚はゼウスの使いではなく、ゼウス自身の化身であったというモチーフが見られる。⁽⁴⁾たとえば、オウイディウスは『変身物語』の中で、歌聖オルベウスに次のように歌わせている。

神々の王はその昔、プリュギアの少年ガニユメーデースへの愛に燃えた。すでにユッピテルは自分が化けるものも見つけて、これなら以前よりもまじだろろうと思っていたが、どんな鳥に姿を変え

でも、自分の雷電を運べる鳥以外はふさわしくないと考えるや、すぐさま、偽りの翼を空に羽ばたかせると、イーリオンの少年をさらった。少年はいまでも酒を混ぜ、ユーノー「ヘーラー」に睨まれないながら、ユッピテルのために酌をしている。

〔変身物語〕一〇・一五五—一六一

この引用の最後に現れるユーノー（ヘーラー）の嫉妬というモチーフについては、レーダーのところでもすでに触れたが、この場合は、ほかにもまして、きわめて深刻な結果をもたらすこととなった。『ギリシア詞華集』にはこんな歌がある。

ガニユメーデースの美しさに苦しめられたヘーラーは、あるとき言った。魂を蝕む嫉妬の突き棒が心に刺さっていたからだ。「トロイアはゼウスのために男の炎を産んだ。だから、私も炎をトロイアに送りつけよう。それは苦しみをもたらすパリスだ。イーリオンの民を訪れるのは驚ではなく、ごちそうにありつく禿げ鷲であろう。そのとき、ギリシア人が苦難の末に戦利品を持ち去るのだ」。

〔ギリシア詞華集〕九・七七、テッサロニーケーのアンティパトロス作

先にトロイア戦争の原因について、「パリスの審判」とそこで褒美とされたヘレネーにあることを記したが、この伝承によれば、それはさらに古く、トロイア創建のときに遡ることになる。そして、ユーノーのトロイア人に対する怒りは、トロイアを滅ぼしても晴れることなく続き、故国を逃れてトロイア王家の血筋を引き継いだアエネーアースとその子孫を苦しめることになる。そのことをウエルギリウスは次のように歌っている。

トロイアで愛しいアルゴス人のために行ったこの戦争ゆえの怒りと激しい苦痛は、いまなお女神

の心から消えてはいなかった。胸の奥深くへとどめつつ、パリスの審判とないがしろにされた美貌、憎い一族とさらわれたガニメデーデースへの榮譽を根にもつ。これらの怒りに燃え、海上いたるところでトロイア人を翻弄した。ダナイー人と無慈悲なアキッレウスから逃れ、生き残った者たちをラテイウムから遠く引き離した。彼らは多くの年月を運命に追いついてはたまたま、あらゆる海をさまよいてめぐった。ローマの民の礎を建てることは、かくも大きな苦難の業であった。

〔アエネーイス〕一・二三—三三

こうしてゼウスの鷲がガニメデーデースをさらったことに根をもつユーノーの怒りは、トロイアからアエネーアースが礎石を置いたローマへと及び、少なくとも、第一次から第三次まで百年にわたるポエニ戦争にいたるまで消えることがなかったとされる。実に千年を越える遺恨である。

2 アルゴスと孔雀

鷲が神々の王であるゼウスの鳥であるとすると、神々の女王であるヘーラーにはきらびやかな鳥が似合い、西暦二〇〇年頃に活躍したアテーナイオスの奇書『食卓の賢人たち』には、

サモスの人メーノドトスが『サモスのヘーラー神殿の蔵品について』の中で言うところでは、「孔雀はヘーラーに捧げられた神聖な鳥である。もしかすると最初に育種されたのがサモスで、ここからよその場所へ広められたのかもしれない〔後略〕。それゆえ、アンティパネースも『兄弟』の中で語っている。『聞くところでは、ヘーリオポリスではフェニックスが、アテーナイではフクロウが生まれた。キュプロスにはほかに見られぬ鳩があり、サモスのヘーラーは、人に聞くところ、

黄金の鳥を有する。美しい姿により誰からも賛嘆される孔雀である。」

〔食卓の賢人たち〕一四・六五五a—b)

と記される。

この孔雀の誕生縁起を、オウイデイウスは次のように描いている。

アルゴスよ、おまえは体を横たえ、あれほど数多く光らせていた目の光も消えた。百の目を同じ一つの夜が包んでいる。これらの目をサートウルヌスの娘ユーノー女神が取り上げて、自分の鳥の翼にちりばめた。星のように輝く宝石が鳥の尾を満たすこととなった。

〔変身物語〕一・七二〇—七三三

アルゴスというのは体中もしくは頭のまわりに無数の目をもつ怪物で、ヘーラーによりイーオーの化身である牝牛の見張りを言いつけられたが、ゼウスの指示を受けたヘルメースによって殺された。イーオーは河神イーナコスの娘で、これをゼウスが見そめて事に及んだが、その現場をヘーラーに見つかりそうになったため、急いでイーオーを牝牛の姿に変えてその場をごまかした。けれども、ヘーラーの疑念は消えず、女神はゼウスから牝牛をもらい受け、アルゴスの監視下に置いたと言われる。アポッロドーロスによると、はじめゼウスはヘルメースにイーオーの化身である牛を盗み出すように命じたが、盗みがうまくいかなかったため、ヘルメースはアルゴスに石を投げて殺したのだという（アポッロドーロス『ギリシア神話』二・一・三三）。それに対して、オウイデイウスでは、メルクリウス（ヘルメース）に最初から殺害の使命が与えられている。命令を受けたメルクリウスは鳥のようにアルゴスのもとへ飛んだ。

手間どることなく足には翼、力強い手には眠りをもたらず杖、頭には帽子を着けた。これらの支度をするや、ユツピテルの息子は父の城塞から大地へと飛び降りた。(同一・六七二—六七四)

メルクリウスの算段はアルゴスを眠り込ませ、その隙に首を掻き切るといふもので、そのとおりには運んだ。ただ、地上に降りた神は、帽子を脱いで翼をはずす一方、眠りをもたらずといふ杖だけをそのまま持っていたにもかかわらず、それはまずアルゴスに近づくため羊飼いに変装するのに使い、怪物を眠らせるためにはじめから用いることはなかった。

アトラースの孫なる神メルクリウスは、腰を下ろすと、日がな一日さまざまなお喋りを重ねて引き止め、葦笛の演奏によつて見張りの目を打ち負かそうと試みる。だが、相手は心地よい睡眠に打ち勝とうと抗い、一部の目は眠りを受け入れても、一部はまだ寝ずの番をしている。

(同一・六八二—六八七)

それでも、メルクリウスが美しい音色の葦笛の由来を話すうちに、アルゴスのすべての瞳が眠りに覆われ、それが怪物の命取りとなった。

さて、ヘルメースには「アルゴス殺し」を意味するアルゴスポンテースの異名があり、アルゴスは右に述べたアルゴスのことだというのが普通の理解であるが、西暦五世紀の文法家マクロビウスはそれに異を唱えている。彼によれば、アルゴスポンテースというあだ名はアルゴスを殺したからではなく、実はアルゴスは天のことで、見張りのために光るたくさんの目は輝く星々のことを表しているという。アルゴスというギリシア語は「明るく輝く」あるいは「素速い」という意味だから、天を示すのにふさわ

しかつたし、アルゴスが牝牛を見張っているように天は大地を上から見つめている。また、エジプトの神聖文字では大地を表すのに牛の絵を配する。そして、メルクリウスが殺すというのは、昼の光で星を見えなくすることだという（マクロビウス『サートウルナリア』一・一九・一二二—一二三）。

いずれにせよ、アルゴスの目を尾にちりばめた孔雀はユーノー（ヘーラー）の聖鳥となり、女神の戦車を引くこともあった。その様子をオウイデイウスは、

サートウルヌスの娘ユーノー女神は、御しやすい戦車に乗って澄み渡る天へと昇る。これを引くのは彩り鮮やかな孔雀たち、先頃アルゴスが殺されたとき鮮やかに彩られた孔雀たちだった。

〔変身物語〕二一・五三二—五三三〕

と描いている。

3 愛と美の女神と鳩

愛と美の女神はギリシアではアプロディーテー、ローマではウエヌス、オリエントではアスタルテと呼ばれる。その聖鳥は鳩とされる。たとえば、ウエルギリウス『アエネーイス』には次のような場面がある。

折しも二羽の鳩が英雄の顔の間近に天より飛んできて、緑の地面に降りた。このとき、偉大なる英雄はそれが母の鳥であることを認め、喜びを祈りに表す。「どうか、おまえたち、道があるなら、案内してくれ。空から進路を指し示してくれ。聖林に向かうのだ。富める枝が肥沃な土に陰をなす

ところだ。あなたもまた、この危急のときに力を貸したまえ、女神なる母上よ」。こう言つて、ぐつと足を踏みしめると、鳩がどのような合図をもたらずか、どこへ向かつて進むかと目を凝らす。餌を捕りつつ、鳩は先へ先へと飛んでゆくが、あとを追う者たちが目で捕らえられる範囲からは出ない。

【アエネーイス】六・一九〇—二〇〇

英雄アエネーアースは、陥落した故国トロイアを落ち延びてから七年あまりの放浪ののち、ようやく目的地の地イタリヤに辿り着いた。いま、クーマエ（ナポリの西にある風光明媚な地）に上陸した英雄は、亡き父アンキーセースを冥界に訪ね、これから彼が率いるトロイア人とイタリヤ先住の民とのあいだに起る戦争のこと、その戦争に彼が勝利したあと千年にわたつてローマを築き上げてゆく彼の子孫たちのことを教えてもらおうとしている。しかし、もちろん、生きた人間がそのまま此岸と彼岸を行き来することはできないため、英雄はクーマエにあるアポローン神殿の巫女に指示を仰ぎ、それに従つて、まず聖林の中に黄金の枝を見つけようとした。右の引用はその場面である。アエネーアースはアンキーセースとウエヌスのあいだに生まれた。ウエヌスはつねに息子アエネーアースを手助けし、このときも自分の鳥である鳩を案内役として送つたというのである。

愛と美の女神と鳩との結びつきはオリエントに遡るものらしい。ヒュギーヌスには次のような話がある。

ユーフラテース川に天から驚くべき大きさの卵が一つ落ちたと言われる。これを魚たちが陸揚げし、その上に鳩たちが座つて十分に温めることでウエヌス女神を取り出した。そののちシリア女神と呼ばれることになつたこの女神が正義と公正さで他の神々を凌駕したとき、ユツピテルによつて

願いをかなえられ、魚たちは星座の仲間入りを果たした。また、このためにシリア人は魚と鳩を神々の中に数え、食べることをしない。
〔神話伝説集〕一九七

ここで「シリア女神」とあるのはアスタルテのことである。アスタルテはまたデルケトーとも呼ばれたらしく、この女神と鳩にまつわる不思議な物語をシキリアのディオドーロスが伝えている。

シリアにアスカローンという町があり、そこから遠くないところにある湖は大きくて深く、魚も多い。湖畔には有名な女神の神域があり、この女神をシリア人はデルケトーと呼んでいる。女神の顔は女性のものだが、体の他の部分はすべて魚で、その縁起は次のようなものである。その土地でもっとも学のある人々の話では、この女神にアプロディーテーが腹を立て、激しい愛欲を吹き込んだ。相手は犠牲を捧げる人々の一人で、容姿も醜からぬ若者であった。デルケトーはこのシリア人と交わり、娘を一人産んだものの、過ちを恥じるあまり、若者を殺したうえ、子供は人の住まぬ岩だらけの場所に捨てた。女神自身も恥ずかしさと悲しさから湖へ身を投げ、体の形を魚に変えた。それゆえにシリア人は今日までこの生き物に手を出さず、魚を神として崇める。ところが、赤ん坊が捨てられた場所のまわりにはたくさんの鳩が巢を営んで卵を孵かえしており、たいへん不思議な仕方
で子供を育てた。鳩たちのあるものは翼で赤ん坊の体全体を包んで温かくし、あるものは近くの畜舎から、牛飼いやその他の牧人の留守を見届けるたびに、口にミルクを含んで運び、一滴ずつ唇のあいだへ落として与えた。子供が一歳になり、より固い食べ物が必要になると、鳩たちはチーズをかじり取ってきて十分な食べ物を提供した。しかし、牧人が戻ってきて、チーズがかじられているのを目にした。彼らは不思議な出来事に驚き、見張りを立て、原因を知ると、赤ん坊を見つけた。

赤ん坊の美しさが際立っていたので、すぐさま畜舎に連れ帰ると、王の家畜番の長に渡した。この男はシンマースという名で、子供がなかったために、その子を娘として育て、世話を尽くした。セミラミスという名をつけたが、それは鳩を意味するシリア語を少し変化させたものである。鳩はその頃より、シリアの全住民から神として崇め続けられている。

〔歴史〕二・四・二一六

ここに登場するセミラミスは歴史上の人物である。紀元前九世紀後半にアッシリア王シヤムシiadアダド五世の妻、アダドリニラリ三世の母で、紀元前八〇五年にユーフラテース西岸にあり、シリアに近いコンマゲネーに遠征したサンムラマトのことだという。ディオドロスの伝えるところでは、セミラミスは成人してのち、美しさだけでなく知謀にもすぐれていたため、まず、アッシリアの大臣オンネスの妻となり、次いで、王ニノス（都ニネヴェの名の起源となった王）の後となり、ニノスの死後は女王として四十二年間も君臨した。バクトリア（現在のアフガニスタンにほぼ相当する地域にあった王国）を占領し、バビローンを建設するなど、さまざまな事績を残したのち、最後は息子ニユアースの謀反に遭う。しかし、それはエジプトで聞いていた神託のとおりであったため、

謀反人を罰することはせず、逆に王権を息子に譲ると、家臣に彼に従うよう命じてから、すぐさま姿を消した。あたかも神託のとおり神々の仲間入りをしたかのようなようであった。ある人々の話では、彼女は鳩になったのであり、たくさんの鳥が宮殿へと舞い降りたが、これらと一緒に飛び去った。それゆえ、アッシリア人も鳩を神として崇め、セミラミスを神格化しているという。

ところで、セミラミスが王権を獲得した経緯として、王妃となったのち王から五日間だけ王位を譲り受け、親衛隊その他を掌握しておき、これらに命じて王を捕縛し殺害した、という有名な話が伝えられている。他方、先に引用した黄金の枝はその起源をフレイザーが『金枝篇』の主題として考究した金枝、つまり、この枝を折り取った逃亡奴隷はアリーキアの森の王に挑戦することができ、王を殺せば自分が王になれるという金枝であると考えられている。鳩が関わる二つの話のどちらにも王を殺害して王権を獲得するというモチーフが現れるのは単なる偶然かもしれないが、それにしても、鳩、とりわけ白い鳩は平和の象徴とされるし、アプロディーテー／ウエヌスが司る愛は流血とは対極にあるように考えられるので少し不思議な気がする。とはいえ、あとにも触れるように、アプロディーテーの怒りが悲劇をもたらすという物語展開もまた、よく見られるものであることは確かである。

4 フェニックス

フェニックス（ギリシア語の発音ではポイニクス）を日本では「不死鳥」と訳しているが、それは誤解を招きやすい訳語と言わなければならない。というのも、フェニックスにも死期は訪れる一方、五百年あるいは千年という長寿、さらには、それ自身の体から再生するというのがこの鳥の特質とされるからである。それはともかく、フェニックスは太陽神の聖なる鳥とされる。「歴史の父」と呼ばれるヘーロドトスは、エジプト人にとって神聖な種々の動物を紹介する中で、次のように記している。

私自身はそれを絵によってしか見たことがない。というのも、姿を現すのはごくまれで、ヘーロドトス「太陽神ヘーリオスの都」の人々の話では、五百年に一度、現れるのは父鳥が死んだとき

ただだという。実物も絵のとおりとすれば、大きさと形は次のようである。羽根の色は黄金のところと赤のところがある。体形と大きさでは驚にほぼ一番近い。次のような仕掛けを作ると言われるが、私自身はその言い伝えを信じていない。それによると、フェニックスはアラビアを発つてヘーリオスの神殿まで父鳥「の遺体」を没薬もつやくで塗り固めて運び、ヘーリオスの神殿に葬る。運ぶときには、まず没薬を固めて運べるだけの大きさの卵の形にし、次いで、それを運べるかどうかを試し、試験がすむと、卵を削り貫いて父鳥を納めてから、また没薬を塗り固めて、父鳥を納めたあとに空いているところを塞ぐ。父鳥を納めても最初と同じ重さに塗り固めると、これをエジプトのヘーリオスの神殿へ運ぶ。このようなことをこの鳥はする、と言われている。(『歴史』二・七三)

ヘーロドトスは、フェニックスの実物を見たこともなく、言い伝え全般に懐疑的であるかのように記しているが、ローマの歴史家タキトゥスはフェニックスが西暦三四年に現れたことを記録し、少なくともその存在は確かなこととしている。

数世紀の長い周期のちフェニックスがエジプトに現れ、話題となった。現地やギリシアの一流の学者たちがこの驚異をめぐり大いに議論を戦わせたが、意見の一致しているところから、不明な点のほうが多いものの、聞いても馬鹿げていないことを述べてみたいと思う。この生き物が太陽神の聖鳥であり、嘴および羽根の彩りが他の鳥と異なることでは、姿を描いた人々のあいだで意見が一致している。寿命についての言い伝えはさまざまである。もつとも一般的なのは五百年間であるが、人によっては、千六百四十一年であると主張して譲らず、これまでには、最初はセソース王8のとき、次にアマースス王9のとき、さらに、マケドニア人として三代目の王であるプトレマイオス6

のときにヘーリオポリスという名の町へ飛来した、という。そのときには、他の鳥たちが大群でそばにきて、見たことのない姿に驚嘆していたそうだが、昔のことで確かではない。プトレマイオスとテイベリウスのあいだは二百五十年足らずであることから、ある人々の考えでは、今度のフェニックスは偽物で、アラビア人の土地から来たのでもなかった。昔の記録が確証する属性が何一つなかった、というのである。つまり、寿命が尽きて、死が近づいたとき、故郷に巣を作り、そこへ生殖の素を注ぎかけると、そこから雛が生まれるが、雛が成長して最初に配慮するのは父鳥の埋葬であり、やみくもにはなく、重い没薬を持ち上げて長い距離を試し、荷物にも行程にも耐えられるようになってから、父鳥の遺体を背負って太陽神の祭壇へ運び、茶毘たびに付す、ということなのだが、これは確かなことではなく、おとぎ話の尾鱈おひながついている。しかし、エジプトでこの鳥が見られるときがあるということには、異論がない。

〔年代記〕六・二八

タキトウスも雛の誕生と父鳥の火葬についての話は信用しておらず、それは歴史家としては当然のことであろう。そのため、ヘーロドトスでもそうだが、「再生」というモチーフは明瞭には現れていない。それが語られるのはオウイデイウスによつてである。

ただ一つだけ自分自身を種子として再生する鳥がある。アッシリア人がフェニックスと呼ぶ鳥で、穀物や草ではなく乳香の樹脂とバルサムバルサムの樹液を糧としている。この鳥は、五世紀間の寿命が満ちたとき、樅かえしの木の樹上や棕櫚しんろうの木の風にそよぐてっぺんに、爪と清らかな口とで巣をこしらえる。そこへ桂皮かんしょうとなめらかな甘松かんしょうの穂、それに砕いたシナモンと金色の没薬を一緒に敷きつめてから、その上へ身を横たえると、芳香に包まれて命を終える。すると、言い伝えでは、同じ年数を生きる

定めのフェニックスの雛が父親の体から再生するという。この雛が年を経て力をつけ、ものが運べるようになる、ずっしりと重い巢を高い木の枝から持ち上げて運び、子の務めを果たす。自分の揺籃であると同時に父の墓でもある巢を運んで軽やかに空を渡り、太陽神の都に着くと、太陽神の神殿の神聖な扉の前にそれを置く。

〔変身物語〕一五・三九二—四〇七

引用は、いわゆる「ピュータゴラスの教説」という長い一節(同一五・七五—四七八)の一部をなしている。哲学者ピュータゴラスは輪廻転生説、つまり、この世のものはすべて変化し、生き物にあっては靈魂はつねに同じでありながら、さまざまな肉体に移り住む、という考えを説いたとされ、オウイデイウスはこの箇所で、この教説の例証を哲学者に長々と連ねさせている。フェニックスはそうした例の一つとして格好であったと言える。ただし、詩人は「教説」の前置きとして「その弁舌に学識はあつたが信用はなかつた」(同一五・七三—七四)と断っている、眉に唾をつけて聞く必要がある。

さて、それはともかく、フェニックスの「再生」はイエスの「復活」と重ね合わされて、キリスト教の中で象徴的な意味合いをもつようになる。その名も『フェニックス』と題された作者不詳の一七〇行からなるエレゲイア詩⁽¹⁰⁾が残っているが、その内容から、ラテン教父ラクタンティウスの作ではないかとの推測もなされた。この詩では、フェニックスは遠く東方にあって天変地異や病氣や犯罪の穢れなどから無縁な極楽の地に棲み、太陽神に仕える鳥とされる。太陽神が宮殿を去って空に出てゆくときには、

神聖な歌の調べを紡ぎ出し、驚くべき声音で新たな光を呼び出す。それにはサヨナキドリの声も、キッラの旋律⁽¹¹⁾を奏でる笛もかなわない。それどころか、瀕死の白鳥でも、キュッレーネーの神⁽¹²⁾の響きよいい堅琴でも真似はできまい。「中略」それはまた、足速き時の刻みを示して昼に夜にえも言われ

ぬ声を響かせる、聖林の祭司にして森にて敬われる神官、ポイボス神の秘儀にあずかる唯一の鳥。
いまや千年の命をまっとうしたときには「後略」

〔フェニックス〕四五―五〇、五七―五九

その聖なる場所を去ってシリアへ渡ると、ギリシア語でフェニックスと呼ばれる棕櫚の木のとっぺんに巣を作り、さまざまな香木を敷きつめた上に横たわる。

そのあいだにも体は命を生む死により滅して白熱し、熱そのものが炎をはらむ。遠く天の光から火を受け取って燃え上がるや、焼けつきて灰に帰す。その灰を、あたかも鉄塊を水に浸して固めるように、塊りにすると、胚珠のごときものが出来上がる。ここから最初は手足のない生き物が起き上がると言われ、この虫の色は乳白色であると言われる。それが尋常ならぬ大きさに成長したあと、突如、定まった時期に身を丸めて卵の形になるや、そこから以前のとおり姿に立ち返る。フェニックスが殻を破って飛び出す。

（同九五―一〇六）

自分自身から生まれるところから、

雌であるにせよ雄であるにせよ、どちらでもあるにせよ、どちらでもないにせよ、愛欲の契りに願慮せぬ幸福な鳥。死に愛欲を抱き、死のみに快を覚える。生まれを得るためにまず死を求める。己れ自身が己れの子、己れの父、己れの跡継ぎ、己れの乳母、つねに己れの養い子。己れであつても同一ではない。己れ自身であつて己れ自身ではなく、永遠の生命を死の恵みから得ているのだから。

（同―六三―一七〇）

〔注〕

- (1) トロイアの前身はゼウスの子ダルダノスが築いたダルダニアで、トロイアはその孫に当たる。トロイアの長男（したがって、ガニメーテースの兄）はイーロスといい、トロイアの別名イーリオンの起源をなした。トロイア戦争が起こるのは、イーロスの孫に当たるプリアモス王の代のこと。
- (2) 次節参照。
- (3) ホメーロス『イーリアス』五・二六五以下参照。
- (4) 『ギリシア詞華集』一一・六四、六五参照。
- (5) 次章第1節「セイレーン」参照。
- (6) 「セソーストリス」とも言われる伝説的な王。
- (7) 在位、前五七〇—五二五年。
- (8) 「善行者」のあだ名があるプロトレマイオス三世。在位、前二四六—二二一年。
- (9) ローマ第二代皇帝。在位、後一四—三七年。
- (10) ダクテュロス（長短短の韻脚）を六脚連ねる詩行と五脚連ねる詩行を一行ずつ交互に綴っていく詩形。
- (11) サヨナキドリについては第I部第6章第2節「テーレウス、プロクネー、ピロメラー」参照。非常に美しい鳴き声とされる。キツラはデルポイの外港で、ここではデルポイと同じ。その旋律とはアポッロンの奏でる楽曲。
- (12) ヘルメースのこと。アルカディア地方にあるキュツレーネー山で誕生したとされることから。